

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅲ

泉南市文化財調査報告書 第十集

1986・3

泉南市教育委員会



## は じ め に

泉南市域における開発は、年々増加の傾向にあります。

この様な状況下、昭和60年度の発掘届出件数は、数十ヶ所に及んでいます。その大半は個人住宅建設に伴うものですが、今年度はその内、男里遺跡8ヶ所、北野遺跡2ヶ所において発掘調査を実施しました。

男里遺跡では、小面積の調査区が多いのにもかかわらず遺構、遺物あるいは包含層などを確認することが出来ました。また北野遺跡におきましても同様であります。それぞれの調査成果は、遺跡の範囲、内容等を知る上で非常に貴重な資料となるものです。

本市においては、上記のように、近年開発等を契機に埋蔵文化財調査を実施する機会が多くなり、徐々に歴史の一端が明確になりつつあるわけです。

今後は、さらに調査を積み重ねていくことにより、遺跡の一層の内容究明に力を注ぎたい所存であります。

最後になりましたが、調査にあたって御協力、御援助を頂きました方々に厚く感謝の意を表するとともに、今後なお一層の御協力をお願いする次第でございます。

泉南市教育委員会

教育長 市 野 春 弘

## 例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が昭和60年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当、実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会社会教育課・仮屋喜一郎を担当者として、昭和60年4月1日着手し、昭和61年3月31日終了した。
3. 調査及び整理の実施にあたっては、奥村毅、井田匡、岡田直樹、神沢かずみ、松浪多加司、大熊健、根来正彦、菊敏宏諸氏の協力を得た。また、広瀬和雄、石神怡、芝野圭之助、渡辺昌宏の諸氏からも有益な助言を得た。記して感謝の意を表する次第である。なお、本書の執筆は仮屋が行った。
4. 本調査にあたっては、写真、スライド等を作成した。広く利用されることを望むものである。

## 目 次

|      |           |    |
|------|-----------|----|
| 第1章  | 調 査 の 経 過 | 1  |
| 第2章  | 男里遺跡の調査   | 4  |
| 第1節  | 既 往 の 調 査 | 4  |
| 第2節  | 位 置 と 環 境 | 4  |
| 第3節  | 第1区の調査    | 5  |
| 第4節  | 第2区の調査    | 6  |
| 第5節  | 第3区の調査    | 8  |
| 第6節  | 第4区の調査    | 10 |
| 第7節  | 第5区の調査    | 11 |
| 第8節  | 第6区の調査    | 11 |
| 第9節  | 第7区の調査    | 12 |
| 第10節 | 第8区の調査    | 12 |
| 第3章  | 北野遺跡の調査   | 14 |
| 第1節  | 既 往 の 調 査 | 14 |
| 第2節  | 位 置 と 環 境 | 14 |
| 第3節  | 第1区の調査    | 15 |
| 第4節  | 第2区の調査    | 16 |
| 第4章  | ま と め     | 17 |

## 図 版 目 次

|     |                      |
|-----|----------------------|
| 第 一 | 遺跡周辺航空写真             |
| 第 二 | 男里遺跡調査区写真（第1、2区）     |
| 第 三 | 男里遺跡調査区写真（第3、4区）     |
| 第 四 | 北野遺跡調査区写真（第1区トレ、2トレ） |
| 第 五 | 男里遺跡出土遺物写真           |

- 第 六 遺跡分布図  
第 七 男里遺跡調査区位置図  
第 八 男里遺跡・北野遺跡各地区遺構図および断面図

## 挿 図 目 次

- 第 1 図 男里遺跡第 2 区地形図  
第 2 図 男里遺跡各地区遺物実測図  
第 3 図 男里遺跡第 7 区出土平瓦実測図及び拓影  
第 4 図 北野遺跡調査区位置図

## 表 目 次

- 第 1 表 発掘調査一覧表  
第 2 表 試掘調査一覧表  
第 3 表 立会調査一覧表

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅲ

## 泉南市文化財調査報告書 第十集

### 第1章 調査の経過

男里遺跡は泉南市男里を中心に、直径約1 kmにも及ぶ広大な範囲からなる。現在までの調査で、弥生前期から近現代まで連綿と続く遺跡であることが判明しており、その豊富な内容は泉南地域有数の遺跡であることを証明している。

1975年以降、小規模なものが大半であるが、行政機関による発掘調査が連続、不連続的に実施されてきている。それらの成果の蓄積により、ある程度の内容が明らかになっている。しかし、それはごく一端にすぎず、その内容を明確にするためには、今後実施する調査を問題意識的に行なうのはもとより、調査によって獲得された成果を既往の調査によって得られた成果と比較検討し、克明に分析することである。

本年度は、個人住宅建設に伴う発掘調査を8件実施した。このうち第1区～第6区までが氾濫原、第7区及び第8区が沖積段丘に立地する。

北野遺跡は泉南市北野及び信達大苗代にかけて、東西約240 m、南北275 mの範囲からなる。

現在までの調査件数は非常に少なく、よって蓄積されたデータも多きを数えない。しかし、それでもいくつか内容の一端を垣間見ることが出来、平安から中近世に至る複合遺跡であろうことが、推測されている。

このような経過をもって、本年度は男里遺跡同様、個人住宅建設に伴う事前発掘調査を2件実施した。

両遺跡内における調査地区、位置、申請者、規模、用途、調査年月は第1表に一覧したとおりである。

第1表 発掘調査一覧表

| No. | 遺跡名  | 地区名 | 位置    | 申請者 | 規模 (㎡)   | 用途   | 調査年月   |
|-----|------|-----|-------|-----|----------|------|--------|
| 1   | 男里遺跡 | 第1区 | 男里    |     | 31.8975  | 住宅増築 | 60年 7月 |
| 2   | 男里遺跡 | 第2区 | 男里    |     | 266.98   | 住宅新築 | 60年 4月 |
| 3   | 男里遺跡 | 第3区 | 男里    |     | 705      | 住宅新築 | 61年 2月 |
| 4   | 男里遺跡 | 第4区 | 男里    |     | 488.78   | 住宅新築 | 60年 5月 |
| 5   | 男里遺跡 | 第5区 | 男里    |     | 231.99   | 住宅新築 | 60年 9月 |
| 6   | 男里遺跡 | 第6区 | 男里    |     | 470      | 住宅新築 | 60年 8月 |
| 7   | 男里遺跡 | 第7区 | 馬場    |     | 232.12   | 住宅新築 | 60年 5月 |
| 8   | 男里遺跡 | 第8区 | 馬場    |     | 324.564  | 住宅新築 | 61年 3月 |
| 9   | 北野遺跡 | 第1区 | 信達大苗代 |     | 892.20   | 住宅新築 | 60年 4月 |
| 10  | 北野遺跡 | 第2区 | 信達大苗代 |     | 1,298.20 | 住宅新築 | 60年12月 |

第2表 試掘調査一覧表

| No. | 遺跡名 | 位置   | 申請者 | 規模 (㎡)   | 用途               | 調査年月日     | 備考                                                                       |
|-----|-----|------|-----|----------|------------------|-----------|--------------------------------------------------------------------------|
| 1   | 範囲外 | 新達市場 |     | 2,270    | 分譲住宅建設           | 60年 6月10日 | 機械掘削。表土直下地山。<br>遺物なし。                                                    |
| 2   | 範囲外 | 男里   |     | 386      | 工場建設             | 60年 6月24日 | 機械掘削。遺物、包含層なし。                                                           |
| 3   | 範囲外 | 新家   |     | 1,395.45 | レストラン建設          | 60年 7月 9日 | 31.6m×0.9m及び31.9m×0.9m<br>のトレンチ設定。弥生中期の溝及<br>び中世Pit確認後本調査。新規発<br>見(新家遺跡) |
| 4   | 範囲外 | 信達岡中 |     | 8,775.25 | 分譲住宅建設           | 60年 8月 6日 | 機械掘削。遺物、包含層なし。                                                           |
| 5   | 範囲外 | 信達市場 |     | 1,210.59 | 分譲住宅建設           | 60年10月30日 | トレンチ2ヶ所設定。機械掘削。<br>遺物、包含層なし。                                             |
| 6   | 範囲外 | 信達牧野 |     | 6,231.88 | ひのきしん管理棟<br>等 建設 | 60年11月 7日 | 機械掘削による断面観察実施。<br>表土直下地山。遺物、遺構なし。                                        |
| 7   | 範囲外 | 中小路  |     | 2,235.16 | 工場建設             | 61年 1月28日 | トレンチ2ヶ所設定。<br>盛土直下黄褐色含礫土の地山。<br>遺物、遺構なし。                                 |



第3表 立会調査一覧表

| No | 遺 跡 名       | 位 置   | 申 請 者 | 規 模 (㎡) | 用 途               | 調 査       | 備 考                        |
|----|-------------|-------|-------|---------|-------------------|-----------|----------------------------|
| 1  | 狐 池 遺 跡     | 信達大苗代 |       | 117.86  | 個 人 住 宅           | 60年 4月10日 | 機械掘削による断面観察を実施する。遺物、包含層なし。 |
| 2  | 狐 池 遺 跡     | 信達大苗代 |       | 100.131 | 親 聞 直 配 所         | 60年 8月 5日 | 表土直下地山。遺物、包含層なし。           |
| 3  | フキアゲ山西遺跡    | 新家    |       | 234.18  | 個 人 住 宅           | 60年 8月 3日 | 断面観察。遺物、包含層なし。             |
| 4  | 男 里 遺 跡     | 男里    |       | 142.34  | 工 場 増 築           | 60年 8月13日 | 断面観察実施。遺物、包含層なし。           |
| 5  | 滝 宮 池 遺 跡   | 信達大苗代 |       | 2,000   | 提体改修工事            | 60年12月 3日 | 断面観察実施。遺物、包含層なし。           |
| 6  | 新家オドリ山東遺跡   | 新家    |       | 181.93  | 個 人 住 宅           | 60年 9月17日 | 遺物、包含層なし。                  |
| 7  | 高 田 山 古 墳 群 | 幡代    |       | 206.93  | 個 人 住 宅           | 61年 3月27日 | 遺物、包含層なし。                  |
| 8  | 高 田 山 古 墳 群 | 幡代    |       | 3       | 瓦 斯 管 埋 設         | 61年 3月 6日 | 機械掘削し断面観察を実施する。遺物、包含層なし。   |
| 9  | 高 田 山 古 墳 群 | 幡代    |       | 245.31  | 個 人 住 宅           | 61年 2月20日 | 表土直下黄褐色粘質土の地山。遺物なし。        |
| 10 | 幡 代 遺 跡     | 幡代    |       | 294.5   | 電話地下線路<br>設 置 工 事 | 61年4月30日～ | 遺物、包含層なし。                  |

## 第2章 男里遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

男里遺跡は、弥生前期より近現代まで連綿と続く有数な遺跡である。大半が水田であることが、遺跡の保存上幸いしている。

男里遺跡における調査の嚆矢は、昭和5年7月藤岡謙二郎氏らによる<sup>(註1)</sup>。以後は、1975年7月に遺跡の南限付近で試掘調査が実施され、弥生式土器を含む包含層が確認されている。1977年3月には、男里神社の東側で倉庫建設に伴う調査で、性格は不明な石敷を検出している。1978年3月には、双子池上池北西端付近における個人住宅建設に伴う調査で、奈良時代の掘立柱建物の倉1棟、平安時代の掘立柱建物の屋2棟が検出された<sup>(註2)</sup>。

1981年3月実施の調査で、鎌倉時代の掘立柱建物3棟が自然堤防上で検出された<sup>(註3)</sup>。そして、1983年6月遺跡の南端において行われた個人住宅建設に伴う調査において、弥生中期の竪穴式住居跡が1棟検出され<sup>(註4)</sup>、同年府水道管理設に伴う事前調査では、弥生中期の木棺墓が数基検出されている。

このように実施された調査は、小規模なものばかりである。しかし、数年にわたりたとえ単発的であっても、一つ一つの調査成果を克明に記録し、それらのデータを積み上げて行くことにより、遺跡の内容がより一層究明されるものと思われる。

### 第2節 位置と環境

男里遺跡は泉南市男里に所在し、金熊寺川が男里川と合する地点の右岸に位置する。遺跡は男里川の旧河道を中心に、沖積段丘、氾濫原、自然堤防上にかけて立地する。遺跡の北側は旧国道26号線が北東－南西方向に横切り、南方においては第二阪和国道が北東－南西方向に走り、幡代遺跡との境をなしている。

旧国道26号線より北側の大半及び遺跡の西端に展開する自然堤防上の集落部分を除き、大半は水田地帯となっており、遺跡は非常に良好な状態で保存されていると推測される。

男里遺跡の立地する男里川流域では、他に前期の遺跡はなく遺跡数そのものも少ない。男里遺跡と指呼の間に、幡代遺跡が沖積段丘の縁辺に立地している。

その生産基盤は、両遺跡とも旧河道もしくは、旧河道縁辺を可耕地として湿田を営んでいたと思われる。

南東 2.3 km の地点の金熊寺川左岸には、滑瀬遺跡が立地する。弥生中期末葉～後期初頭の堅穴式住居跡が 4 棟検出されており、当該期での男里遺跡に居住していた集団との関連が問われる。また、1.5 km 南東の愛宕山山中より銅鐸が出土しており、男里遺跡に居住していた集団と銅鐸祭祀との有機的関連を十分推測させるものである。今後、各遺跡ごとの内容を克明に究明し、そして遺跡相互の比較検討を逐一実行していくことが、当該期の歴史環境を復元する上で不可欠のものとなる。

### 第 3 節 第 1 区の調査

#### 1. 位置（図版第七）

男里遺跡の北側を北東－南西方向に旧国道 26 号線が横切るが、本調査区はさらに北側の氾濫原に位置する。この地点は遺跡の北端部にあたり、過去調査が殆んど実施されていない場所である。

#### 2. 層位と遺物の出土状況（図版第八）

調査区の土層は 6 層である。第 1 層が盛土で約 70 cm、第 2 層が暗灰色土（耕土）で 5 ～ 10 cm、第 3 層が黄灰色土で 20 cm、第 4 層が淡褐色土で 7 cm、第 5 層が灰黄色土で 6 cm、第 6 層がクサリ礫混じりの褐色土で 25 cm の厚さを測る。遺物は、第 3、第 4 層より中世期の土師器（蛸壺）、瓦器（椀）、の細片が微量出土している。地山は、黄褐色含礫土である。なお遺構は発見されなかった。

#### 3. 出土遺物

出土した遺物は、極めて少量で、しかも細片の為図示し得るものは無い。遺物の種類は、瓦器（椀）、土師器（蛸壺）などである。

瓦器椀は小破片のものが 1 点出土するのみで、しかも器壁面の磨滅が激しく

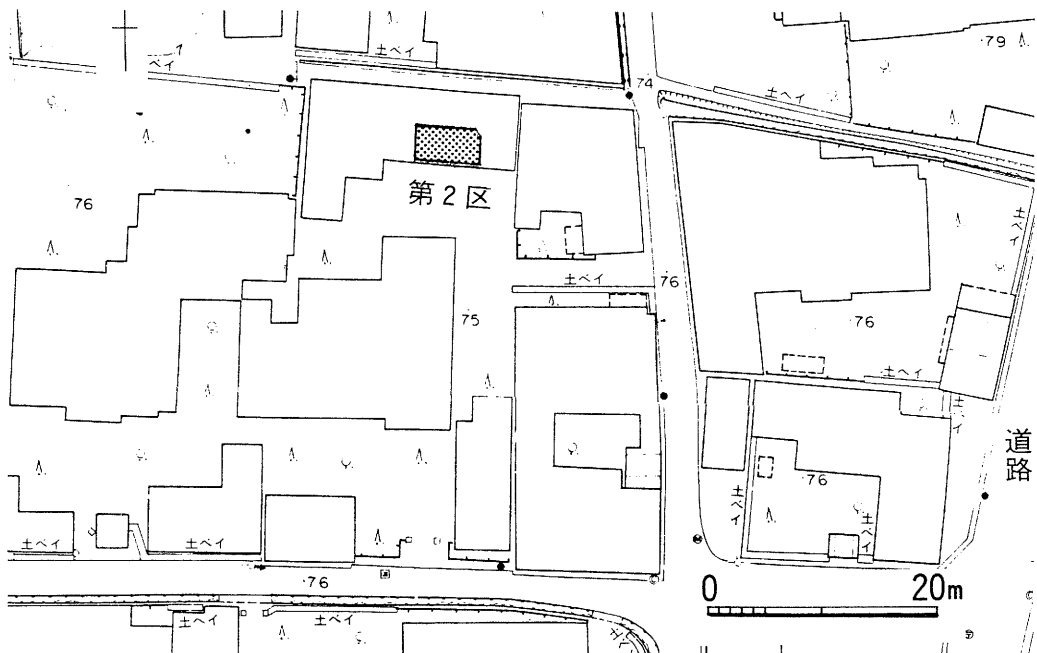
法量、調整とも不明である。

土師器蛸壺は体部の小破片が1点出土する。全形は知り得ず十分な観察は不可能であるが、外面は成形時の凹凸を残す。内面は撫でを施すが部分的に凹凸が残る。土師質の製品で焼成は良好である。色調は白燈色を呈す。胎土は、径0.2～0.5 mm程の砂粒を多く含み、また若干の赤色粒も混じる。器壁は厚く1.3～1.6 cmを測る。調整、胎土、色調から55年度調査で出土した中世期の蛸壺と類似しており、同様のものと思われる。

#### 第4節 第2区の調査

##### 1. 位置（図版第七）

調査区は旧国道26号線男里交差点より北北西に約175 mの地点である。この地点は、遺跡の北西部で男里川によって形成された自然堤防上にあたる。周辺は、現在の男里集落であるが、北へ75 m程で一帯水田地帯となる。また約270 m南には平安後期創建の光平寺跡が存在する。



第1図 男里遺跡第2区地形図

##### 2. 層位と遺物の出土状況（図版第八）

第2区の土層は大別して4層からなり、第1層が盛土約45 cm、第2層が暗

灰色土（耕土）で 6 cm、第 3 層が淡灰褐色シルトで 14 cm、第 4 層が淡灰褐色で 25 cm の厚さを測る。遺物は第 3、第 4 層より須恵器（蓋・甕）、土師器（甕）、黒色土器（椀）、瓦器（椀）、平瓦などの細片が出土している。地山は黄褐色粘質土で、遺構は全てこの面で検出された。

### 3. 遺構（図版第八）

検出された遺構は、落ち込み 2 ケ所（SX01、02）、ピット 12 ケ所である。

○ SX01 調査区の北西隅で検出されたものであるが、北西側調査区域外へ広がる為、全体の検出は行なえず、プランは不明である。深さは 3～8 cm を測る。底部は平坦、肩は緩やかである。埋土は灰黒褐色粘質土が堆積する。遺物の出土が無く、時代等詳細については不明である。

○ SX02 調査区の南西隅で検出されたが、SX01 同様調査区域外とへ広がる為、全体の検出は行なえずプランについては不明である。深さは 3 cm を測り、埋土は灰褐色である。遺物の出土は無い。

○ ピット 円形乃至楕円形で直径 40 cm 前後、埋土が黒褐色粘質土のもの 5 ケ所（P-1・2・3・4）と、同じく円形乃至楕円形で直径 24 cm～28 cm、埋土が褐色土のもの 6 ケ所（P-5・6・7・8・9・10）、また直径 20 cm 前後で、埋土が灰褐色土のもの 2 ケ所（P-11・12）が検出された。遺物の出土は無く各ピットの時期等は不明であるが、相互の切り合い関係により、P-2→P-6→P-9→P-11 という事がわかる。埋土が同一のものを同時期の所産であると考えれば、P-1・2・3・4→P-5・6・7・8・9・10→P-11・12 という先後関係が抽出される。

調査区は約 5 m<sup>2</sup>と小面積にもかかわらず、遺構が密集して検出された。調査区周辺にかなり遺存しているようである。

### 4. 出土遺物（第 2 図）

出土した遺物は、少量でしかも全体を知り得るものは、非常に少ない。種類を列記すると次のようになる。須恵器（蓋・甕）、土師器（甕）、黒色土器（椀）、瓦器（椀）、平瓦などである。

須恵器蓋(1)は口縁部のみ残存で全形は知り得ない。口縁端部、内傾する面を有する。口縁部と天井部の境は、比較的明瞭である。調整は内外面とも横撫でを施す。焼成は良好で暗青灰色を呈する。胎土は若干の砂礫の他に、黒色微粒子を含む。口径は13 cm。甕は体部のみの小破片でしかも磨滅が激しく詳細は不明である。

土師器甕も同様磨滅した体部の細片であるが、外面に刷毛目を施すものがある。焼成は比較的良好で、赤燈色を呈す。

黒色土器碗は内面黒色処理を施すもので、いわゆるA類と呼ばれているものである。細片でありしかも器壁面の磨滅の為、形態及び調整の詳細は不明である。

瓦器碗は底部のみの細片で、全体の形態は不明であるが、底部外面には矮小化した高台が付く。調整は内外面とも磨滅が激しく観察不可能である。焼成は軟質で黒灰色を呈す。胎土は砂粒を殆んど含まない精良なものである。

平瓦は細片が1点出土したのみで、内面横位の撫でを施すが、外面は磨滅の為不明である。焼成は良好で黄褐色を呈す。胎土は0.2～1 mm程の砂礫を少量含む。厚さ約1.6 cmを測る。

## 第5節 第3区の調査

### 1. 位置（図版第七）

第3区は遺跡のほぼ中央部にあたり、東方には双子池が所在する。この地点は男里川によって形成された氾濫原にあたる。調査区の東側約55 mの地点において、昭和53年度調査で奈良時代及び平安時代の掘立柱建物跡が検出されている。

### 2. 層位と遺物の出土状況（図版第八）

調査区の土層は7層からなる。第1層が盛土で約14 cm、第2層が暗灰色土で、12 cm前後、第3層が鉄分混り灰色土で10 cm堆積する。第4層は灰色混り黄色粘土で10 cm、第5層が黄色混り灰色粘土で12 cm、第6層が褐色混り灰色シルトで約5 cm、第7層が黄褐色砂質土で4 cmの厚さを測る。遺物は第4、第

5層より、弥生式土器、須恵器（杯・蓋）、瓦器（椀）、土師器（蛸壺）等が出土している。地山は黄褐色土で、遺構はこの面で検出された。

### 3. 遺構（図版第八）

調査面積が4.5 m<sup>2</sup>と小規模なものにもかかわらず、調査区南半部において溝状の遺構を検出した。しかし、その大半は調査区域外へと広がる為、プランは不明である。主軸は東西方向で、深さは48 cm以上、幅1.3 m以上である。肩は緩やかである。埋土は3層からなり、第1層が灰褐色粘質土で弥生式土器片、須恵器（杯・蓋・甕）、土師器（杯）の細片が微量出土した。第2層が黄灰褐色粘質土、第3層が濃灰褐色粘質土である。

### 4. 出土遺物（第2図）

出土遺物は細片が少量出土するのみで、しかも磨滅が激しく全体の観察可能なものは少ない。種類は弥生式土器（鉢）、須恵器（杯・蓋・甕）、土師器（杯）、瓦器（椀）の日常容器の他、漁具（蛸壺）が出土している。

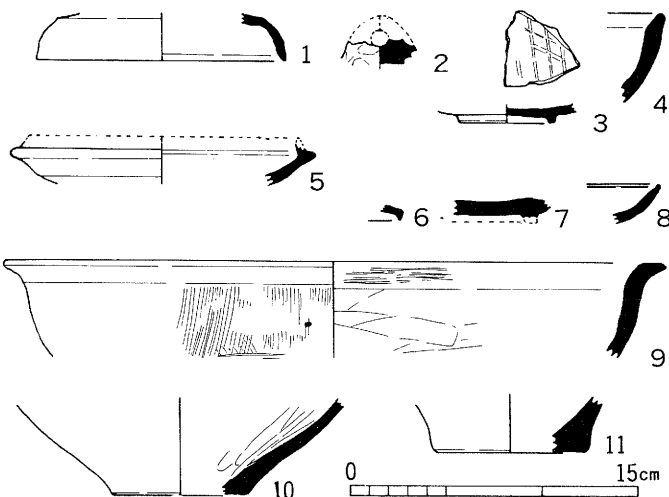
弥生式土器鉢(4)は、口縁部及び体部上半にかけての細片である。口縁部は僅かに外反し端部は丸くおさめる。また、軽く指によっておさえた片口状の部分がみられる。焼成は良好の部類で、燈赤色を呈す。胎土は、0.2～3 mm程の砂礫を多量に含み荒い。

須恵器杯は底部のみの残存で、外面に高台をもつものである。高台の形態は、端部欠落の為不明である。内外面とも横撫でを施す。焼成は堅緻で、青灰色を呈す。胎土は、砂礫を殆んど含まない精良なものである。蓋は2点出土しており口縁部内面にかえりを持つものと、持たないものがある。かえりをもつものは、細片のため十分な観察は出来ないが、内外面と横撫でを施す。焼成は堅緻で淡青灰色を呈し、砂粒を若干含む。図示した蓋(6)は、口縁部のみの微細片で内外面とも横撫でを施す。焼成は堅緻で青灰色を呈す。精良な胆土である。

土師器杯、細片で図示出来るものはなく、また磨滅の為観察不可能なものばかりである。瓦器椀(3)は、底部のみの破片である。底部外面撫でを施し、内面に格子の暗文を施す。焼成は堅緻で淡灰色を呈す。胎土はほとんど砂礫を含ま

ない精良なものである。口台径 5 cm。

蛸壺(2)は所謂、釣り鐘型の製品である。調整は内外面とも、磨滅の為不明である。焼成は良好の部類で、黄燈色を呈す。胎土は若干砂礫を含む。



第2図 男里遺跡各地区出土遺物実測図  
(1・第2地区、2~4・第3区、5・第4区、6~11・第6区)

## 第6節 第4区の調査

### 1. 位置(図版第七)

第4区は、旧河道部分にあたる双子池上池南西隅より、西へ75 mの地点に位置する。遺跡の南西部で、氾濫原に立地する。

### 2. 層位と遺物の出土状況

本調査区の土層は5層からなる。第1層が盛土で約50 cm、第2層が暗灰色土(耕土)で15 cm、第3層が黄褐色粘質土(床土)で15 cm、第4層が灰褐色土で10 cm、第5層が褐色土で18 cmの厚さを測る。遺物は第5層より須恵器(杯)1点及び土師器微細片が出土するのみである。地山は黄褐色土含礫土である。

なお遺構の発見はされなかった。

### 3. 出土遺物

出土した遺物は、前述のごとく非常に少なく、須恵器(杯)1点、土師器細片が微量出土するのみである。土師器は微細片でしかも磨滅が激しい為、観察不可能である。

須恵器杯は、口縁端部の欠落した細片であるが、口縁部内外面及び底部内面に横撫でを施し、底部外面に回転篋削り調整を施す。焼成は堅緻で淡青灰色を



呈す。少量の砂粒を含むが、よくしまった胎土である。口径推定 14 cm。

## 第 7 節 第 5 区の調査

### 1. 位置（図版第七）

調査区は遺跡の南西隅に位置し、男里川により形成された氾濫原に立地する。北北西 100 m の地点には、平安後期創建の光平寺跡が所在する。

### 2. 層位と遺物の出土状況（図版第八）

調査区の土層は大別して 5 層からなる。第 1 層が盛土で約 40 cm、第 2 層が暗灰色土（耕土）で 8 ～ 14 cm、第 3 層が淡灰褐色土で 13 cm、第 4 層が淡褐色粘質土で 10 ～ 16 cm、第 5 層が淡褐色シルトで 32 cm を測る。地山は淡褐色含礫砂質土である。なお、遺物及び遺構は検出されなかった。

## 第 8 節 第 6 区の調査

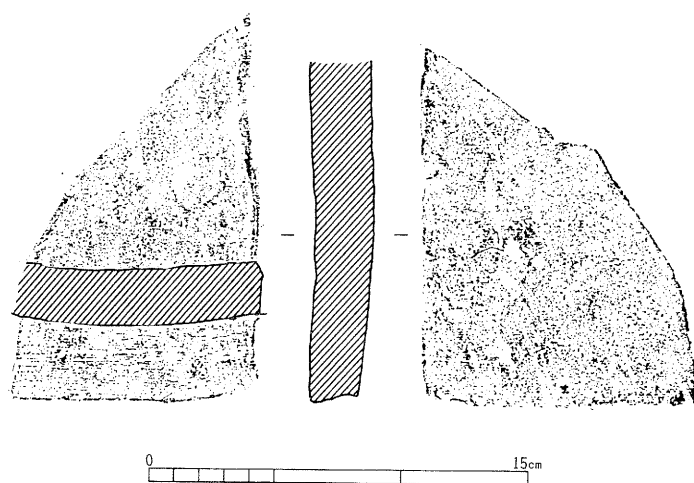
調査区は、遺跡のほぼ中心に所在する双子池上池の東 100 m に位置し、氾濫原に立地する。調査は激しい湧水の為、続行不可能となり遺構の検出及び層位の詳細については、確認出来なかった。遺物は床土下の土層より、弥生式土器、須恵器（杯・甕）、土師器（杯・甕）、陶器、サヌカイト剥片が少量出土している。

弥生式土器は、底部片が 2 点出土している。(11)は甕の底部と思われるが、器壁の磨滅が激しく調整は不明である。焼成は良好の部類で、淡黄灰色を呈す。胎土は砂礫の混入が多い。底径 8 cm を測る。(10)は壺の底部と思われるもので、内面縦位の撫でを施す。外面は器壁の残りが悪く不明瞭であるが、撫でのみ施しているようである。焼成は良好で黄赤褐色を呈す。胎土は砂礫を多く含む。底径 7 cm。(7)は須恵器杯で、底部外面に高台が付くものである。高台は底部と口縁部の境より、やや内側に付いている。端部が欠落している為、形態は不明である。調整は内外面横撫でを施す。焼成は堅緻で青灰色を呈する。胎土は砂礫を殆んど含まない精良なものである。(8)は土師器の杯で、口縁部付近の細片で、全体の形態は不明であるが、口縁部は外反し端部に至り、端部は内面に肥

厚する。内外面とも横撫で調整を施す。焼成は良好で黄燈色を呈す。胎土は砂粒を殆んど含まない精良なものである。(9)は土師器埴である。全形は知り得ず詳細は不明であるが、口縁部は外反し端部に至る。端部は丸くおさめる。調整は、口縁部内面横位の刷毛を施し、外面横撫でを施す。体部は内面篋削りの後かるく撫でを施す。外面は縦位の刷毛調整を施す。焼成は良好で淡褐色を呈す。胎土は砂礫を殆んど含まない精良なものである。口径 34.6 cm。口縁部から体部外面にかけて、煤が付着している。

### 第9節 第7区の調査

調査区は遺跡の東端に位置し、個人住宅建設に伴う調査でトレンチを設定したが、盛土直下地山面となり包含層はもとより、遺構などはまったく確認されなかった。ただ地山直上より平瓦が1点出土しており、後述する第8区と考



第3図 男里遺跡第7区出土平瓦実測図及び拓影

えあわせて、当該期の遺構の存在を窺わせる。図示した平瓦は須恵質の製品で、凸面凹面とも多量の離れ砂が付着している。焼成は堅緻で暗青灰色を呈す。胎土は若干砂礫を含む程度である。厚さ 1.8 ～ 2.4 cm。

### 第10節 第8区の調査

#### 1. 位置（図版第七）

本調査区は遺跡の東端で、第7区より南西 35 m の間に位置する。地形的には沖積段丘面上に立地するものである。

## 2. 層位と遺物の出土状況

調査区の層位は5層からなり、第1層が盛土で約45 cm、第2層が暗灰色土（耕土）で20～28 cm、第3層が淡灰褐色で10 cm、第4層が淡褐色土で18 cm、第5層が淡褐色砂質土で20 cmの厚さを測る。遺物は極めて少量で、第5層より平瓦片が出土したのみである。

## 3. 出土遺物

遺物は前述のごとく少量で、しかも小片のため図示し得なかったが、凸面に縄叩き目と離れ砂が、凹面には離れ砂が多量に付着している。焼成は良好で黄灰色を呈す。胎土はやや砂礫を含む。厚さ1.8～2.3 cm程である。

### 註

1. 藤岡謙二郎『泉南群雄信達村弥生式遺跡』
2. 広瀬和雄『男里遺跡発掘調査報告書』（泉南市教委・1978）
3. 広瀬和雄、藤沢真依、渡辺昌宏、久米雅雄、仮屋喜一郎、『男里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（泉南市教委・1981）
4. 仮屋喜一郎『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』（泉南市教委・1984）

## 第3章 北野遺跡の調査

### 第1節 既応の調査

北野遺跡は泉南市北野及び信達大苗代に所在し、長径 275 m、短径 240 m の範囲からなる遺跡である。地形分類的には、洪積段丘低位面に立地する。

本遺跡はサヌカイト剥片等の散布により周知されていたが、現在までに遺跡内で実施された調査は、最初に第二阪和国道建設時に試掘調査が実施されている。この調査で遺構、遺物は検出されなかった。次いで 1980 年 5 月に個人住宅建設に伴う事前発掘調査が実施され、平安時代に相当する掘立柱建物跡を検出している。1982 年には、遺跡の南東部における倉庫建設に伴う調査で、非常に良好な遺物包含層を確認している。以上が北野遺跡での既往の調査すべてである。

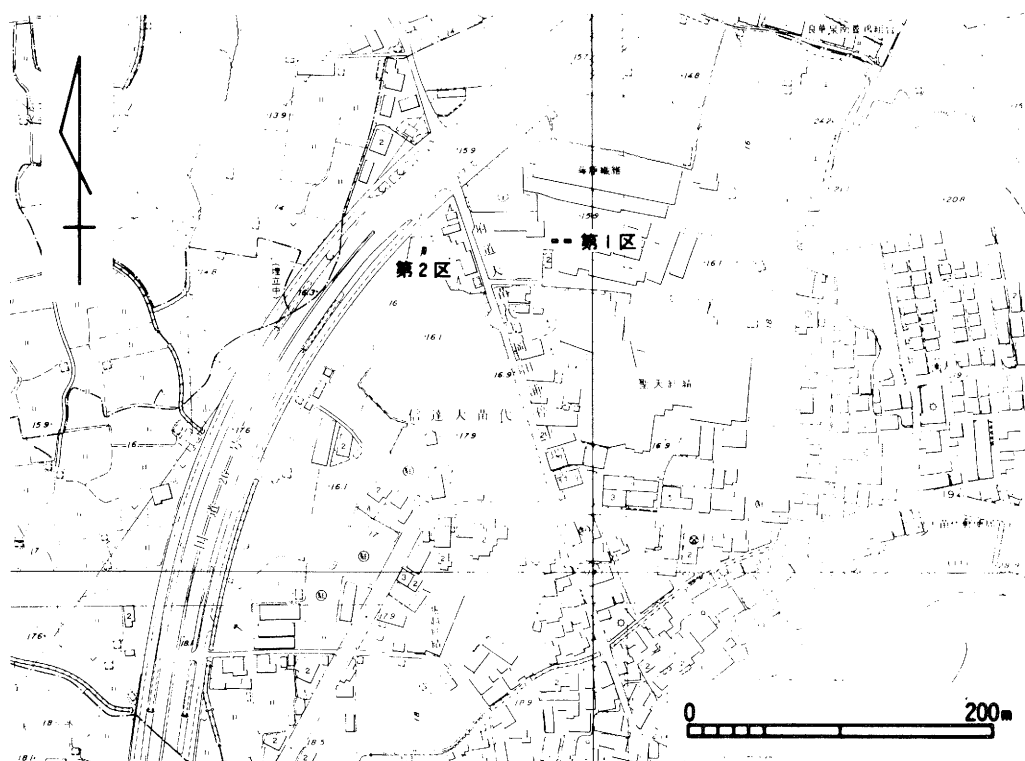
件数は少ないが、それでも遺跡の一端を垣間見ることが出来る。今年度実施した調査ヶ所は、2ヶ所でいずれも個人住宅建設に伴うもので小面積の調査である。しかし、遺構あるいは、包含層の拡がりなどを確認することが出来た。

### 第2節 位置と環境

北野遺跡は洪積段丘低位面に立地しており、東側指呼の間には、白鳳創建寺院の海会寺跡が所在している。そのすぐ東側に檜井川が西北流する。この川の左岸に分布する遺跡は、弥生時代中期の高地性集落の範疇に属する向井山遺跡のほか、低位段丘面に平安後期以降の所産になる仏性寺跡がみられる。

いっぽう右岸では、檜井川の旧河道とその周辺部の沖積段丘面に多くの遺跡が存在している。船岡山遺跡、夫婦池遺跡、道池遺跡、三軒屋遺跡など弥生時代前期より歴史時代まで続く遺跡が、相互に関連性を持ちながら展開してるようである。これは檜井川左岸の動向とは、かなり異なった現象として如実に現われている。このことは、段丘面における開発と何ら無関係ではない。北野遺跡そのものが、平安時代以降に営為を開始しているように、仏性寺跡等も含め段丘面開発の時期に起因すると思われる。

今後はさらに調査の進行により、地形と集落との関わりを克明に究明することが出来るであろう。



第4図 北野遺跡調査区位置図

### 第3節 第1区の調査

#### 1. 位置（第4図）

調査区は遺跡の南西部に位置する。調査区の西側には、北北西－南南東方向に府道大苗代岡田停車場線が走っている。遺跡は低位段丘面に立地する。

#### 2. 層位と遺物の出土状況（図版第八）

調査区の基本的な土層は5層からなる。第1層が盛土で約38cm、第2層が暗灰色土（耕土）で19cm、第3層が淡灰褐色土で17cm、第4層が淡褐色粘土質で8cm、第5層が淡褐色シルトで17cmの厚さを測る。遺物は第4、第5層より土師器細片が微量出土している。地山は淡褐色含礫砂質土である。なお遺構は全てこの面で検出された。

#### 3. 遺構（図版第八）

第1トレンチ、第2トレンチにおいて、それぞれ2ヶ所ずつピットを検出し

た。ピットは円形乃至楕円形で、直径16～30cmである。埋土は全て褐色土である。遺物等の出土がなく、時代等については不明である。

#### 4. 出土遺物

出土した遺物は、土師器の細片のみで、しかも器壁面の剥離したものばかりの為、形態、調整等は全く不明である。

### 第4節 第2区の調査

#### 1. 位置（第4図）

遺跡の北端を第二阪和国道が、北東－東西に横切る。調査区はこの国道のすぐ南側、つまり遺跡の南西端に位置する。南東 75 m の地点に第1区が所在する。

#### 2. 層位と遺物の出土状況（図版第八）

調査区の土層は9層からなる。第1層が盛土で20～30cm、第2層が暗灰色土（耕土）で10～20cm程、第3層が黄灰色土（床土）で4cm、第4層が灰黄褐色土で4～8cmがそれぞれ堆積している。第5層が黄灰褐色土で10～18cm、第6層が黄灰色粘質土で7～12cm、第7層が黄褐色粘質土で10cm、第8層が礫混じり黄褐色粘質土で3～12cm、第9層が褐色土で16cmの厚さを測る。遺物は第9層より磨滅した土師器の微細片が極めて少量出土した。地山は暗黄色粘質土である。なお遺構は発見されなかった。

## 第4章 ま と め

60年度の発掘調査は、男里遺跡8ヶ所、北野遺跡2ヶ所、合計10ヶ所で実施した。男里遺跡では、1、2、3、4、6区が男里川によって形成された氾濫原に、5区が自然堤防上に、7、8区が沖積段丘の縁辺部に位置する。

これらは何れも小面積の調査で、遺構、遺物等の検出が必ずしも十分な状態でない。しかし、それでもいくつかの新たな知見を獲得することができた。

2区ではピット及び落ち込みが、3区では溝がそれぞれ検出されており、特に2区で検出されたピットは、形態、規模、埋土の状況などから掘立柱建物の柱掘方と思われる。また、柱掘方は相互に切り合い関係を有し、3時期にわたる掘立柱建物の先後関係を示している。各建物の時期は、埋土内よりの出土遺物が全くなく不明確であるが、遺構面直上包含層等より出土している遺物と、掘方の形態、規模などを加味すると古墳時代後期、平安時代、鎌倉時代といった年代観が大胆ではあるが与えられそうである。今回は調査区が小面積の為、建物のプランは判明しなかったが、遺構の密集度などから、周辺部でかなりの当該期にあたる掘立柱建物の存在を窺わせる。また2区の南170m地点、55年度調査によって検出された掘立柱建物との何らかの関連性が問われる。

3区で検出した溝は、埋土内出土遺物より8世紀後半代の所産になると思われる。溝の性格等については、何分小面積の調査で、遺構の一部分を検出し得たにとどまっており、詳細は不明である。この時期の周辺遺構としては、3区の東約60mの地点において奈良時代の掘立柱建物の倉が1棟検出されている。当該期における集落を構成する一つの遺構として、この溝が掘削されたものであろう。今後の調査の進展により、溝の性格等が明らかにされると思われる。

また今年度は、沖積段丘上で2ヶ所（7、8区）調査が実施された。いずれも遺構の検出はなかったが、平安後期～中世期にかけての平瓦が数点出土しており、この付近に寺院跡などが存在していた可能性が十分考えられる。仮に寺院跡だとすると、約1km西に所在する平安後期創建の光平寺跡との関連を考えていかななくてはならない。今後の調査で瓦の分布範囲、遺構の検出などによる寺域の確認等詳細な内容を究明しなくてはならない。

北野遺跡は、今年度2ヶ所の調査が実施された。いずれも小面積な調査ということもあって、1区で数ヶ所の時期不明なピットを検出した以外は、遺構、遺物等検出されなかった。55年度の調査で、平安時代に該当する掘立柱建物跡の存在が確認されており、今後は当該期を中心とした集落範囲の究明に努めなくてはならない。

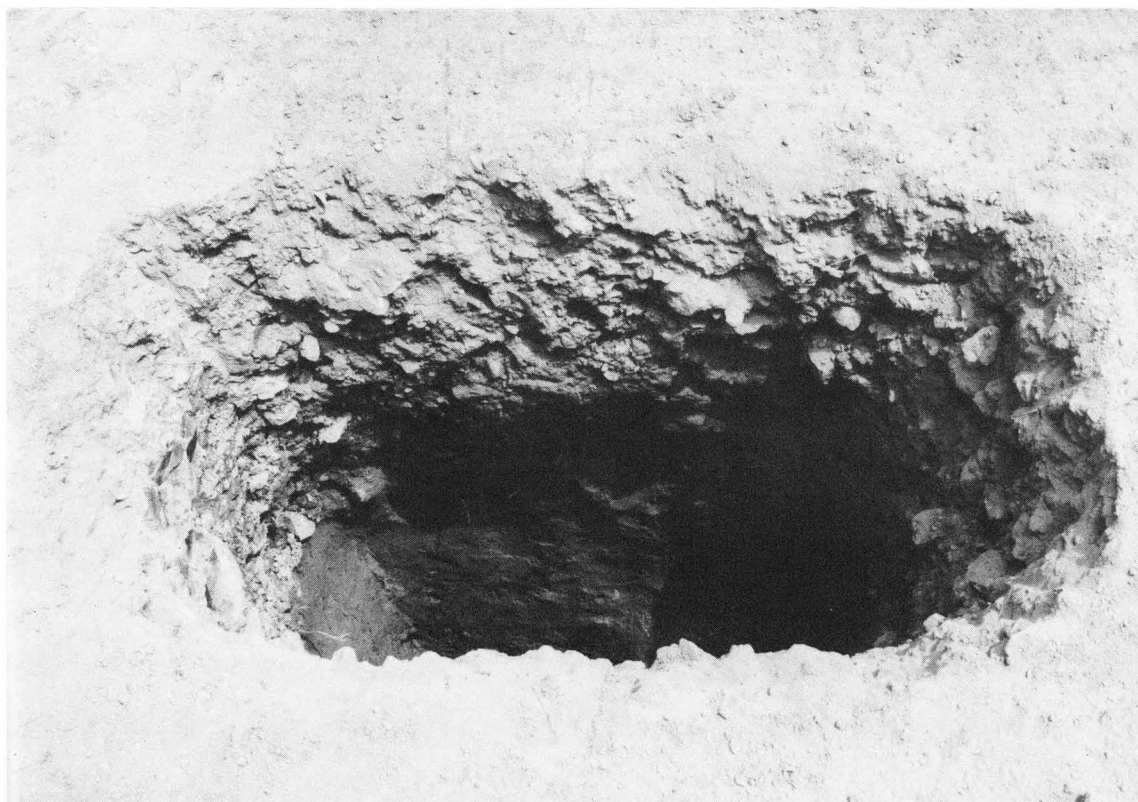
以上、当該年度においても小面積の調査を中心に実施し、いくつか新たな知見を獲得することが出来た。唯、遺構全体の内容究明という観点からは、ごく一端にすぎない。しかし、この様に小規模な調査であっても、一つ一つの調査で得られた資料を積み上げていくことにより、全体の内容究明へとアプローチし得るのではないかと思う。



図

版





第1区全景南から



第2区全景東から





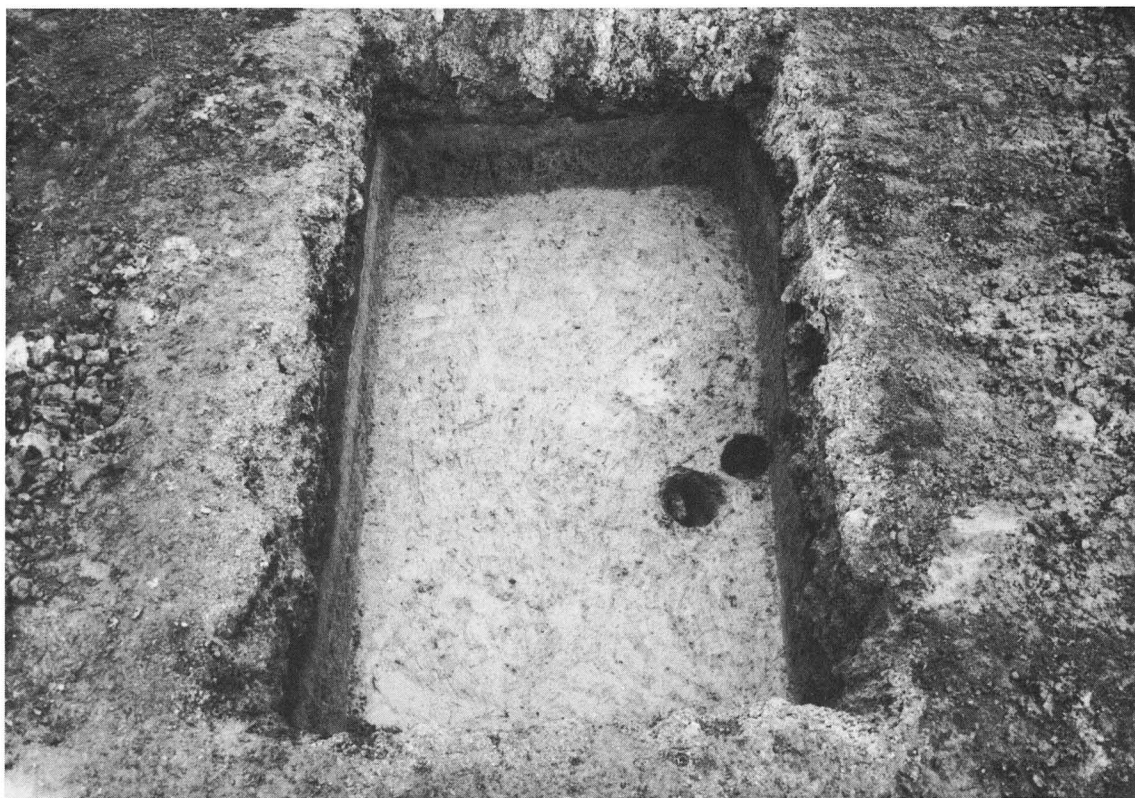
第3区全景北から



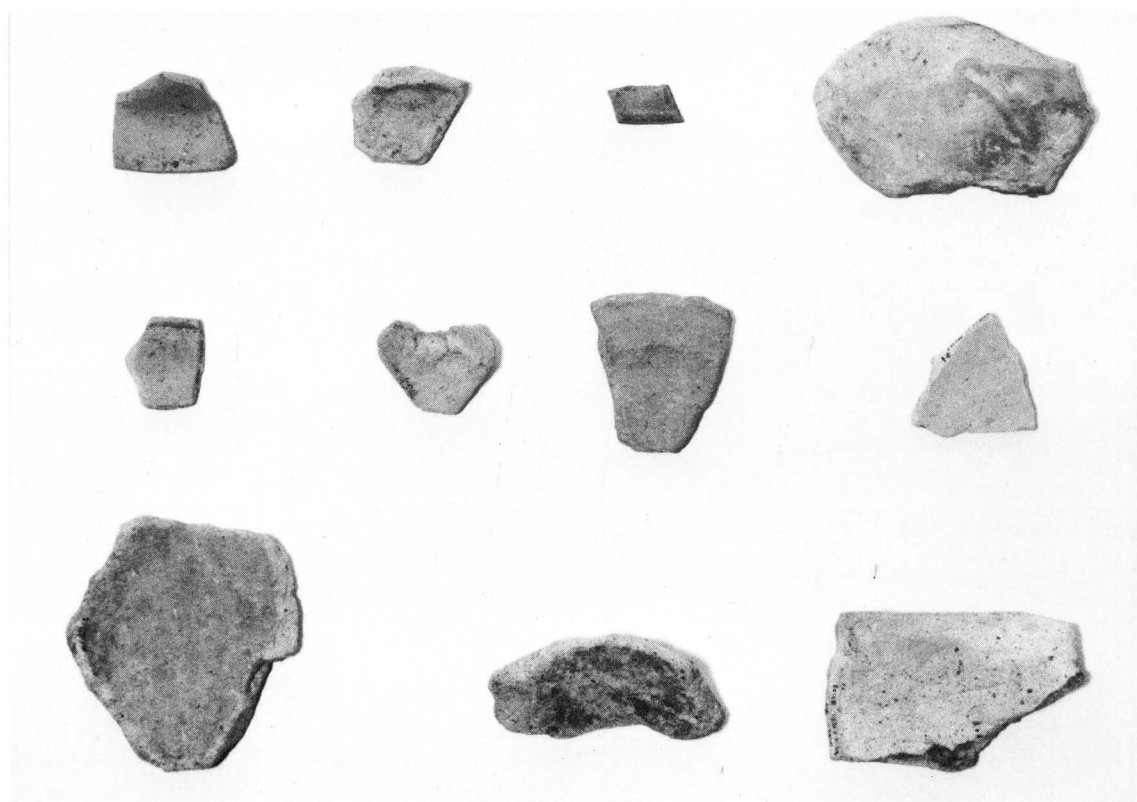
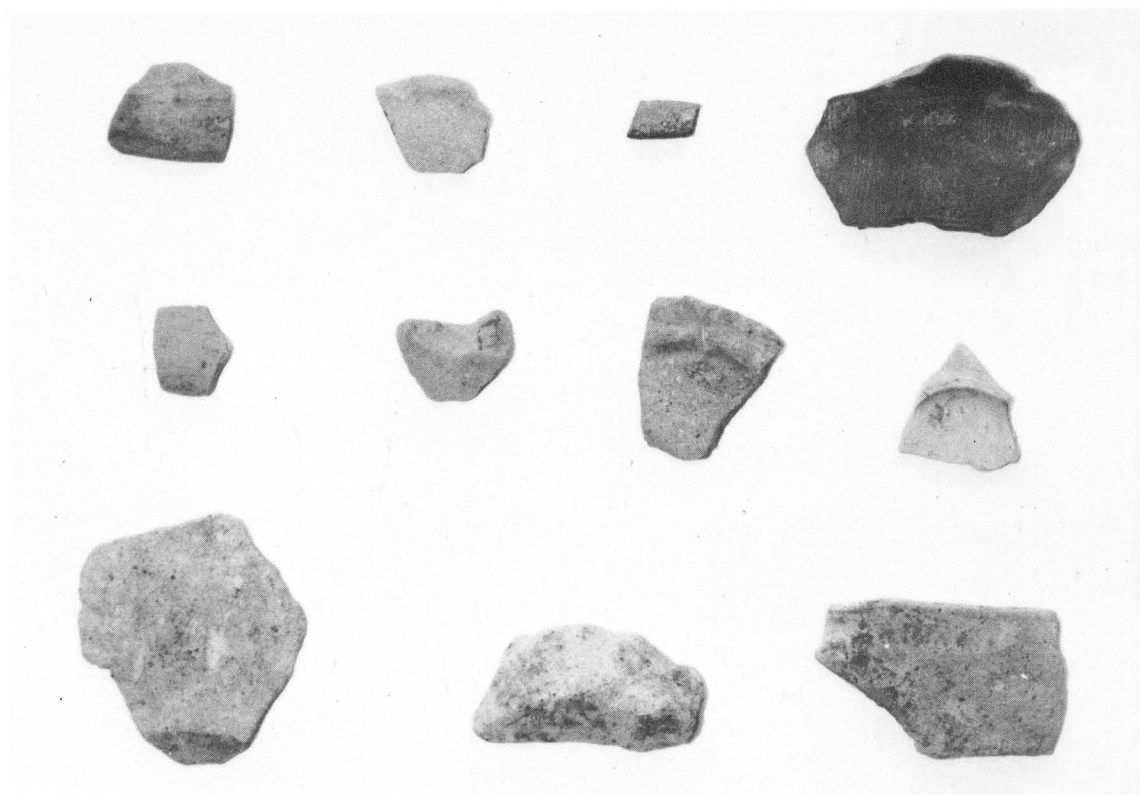
第4区全景南から



第1トレンチ全景東から

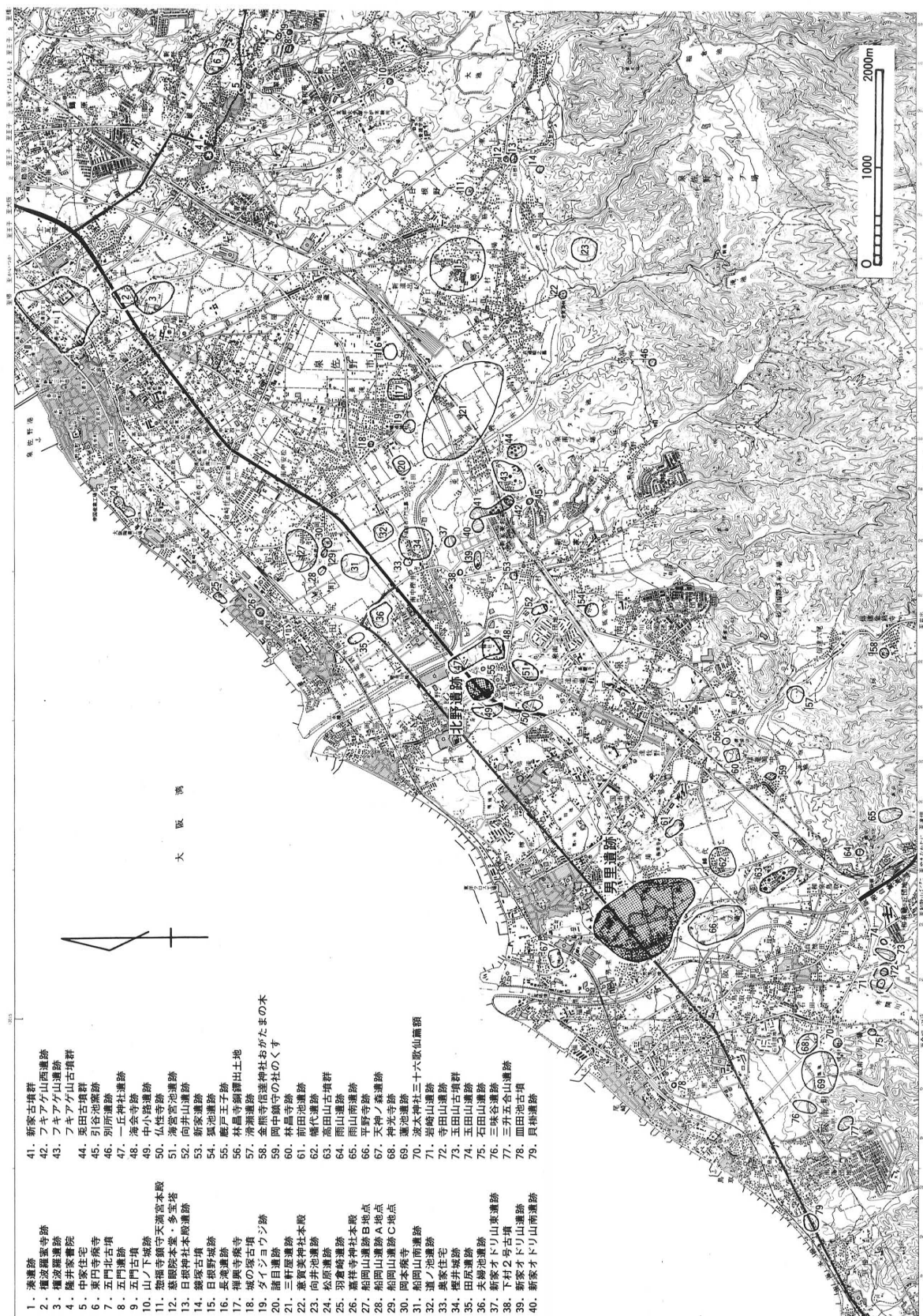


第2トレンチ全景東から

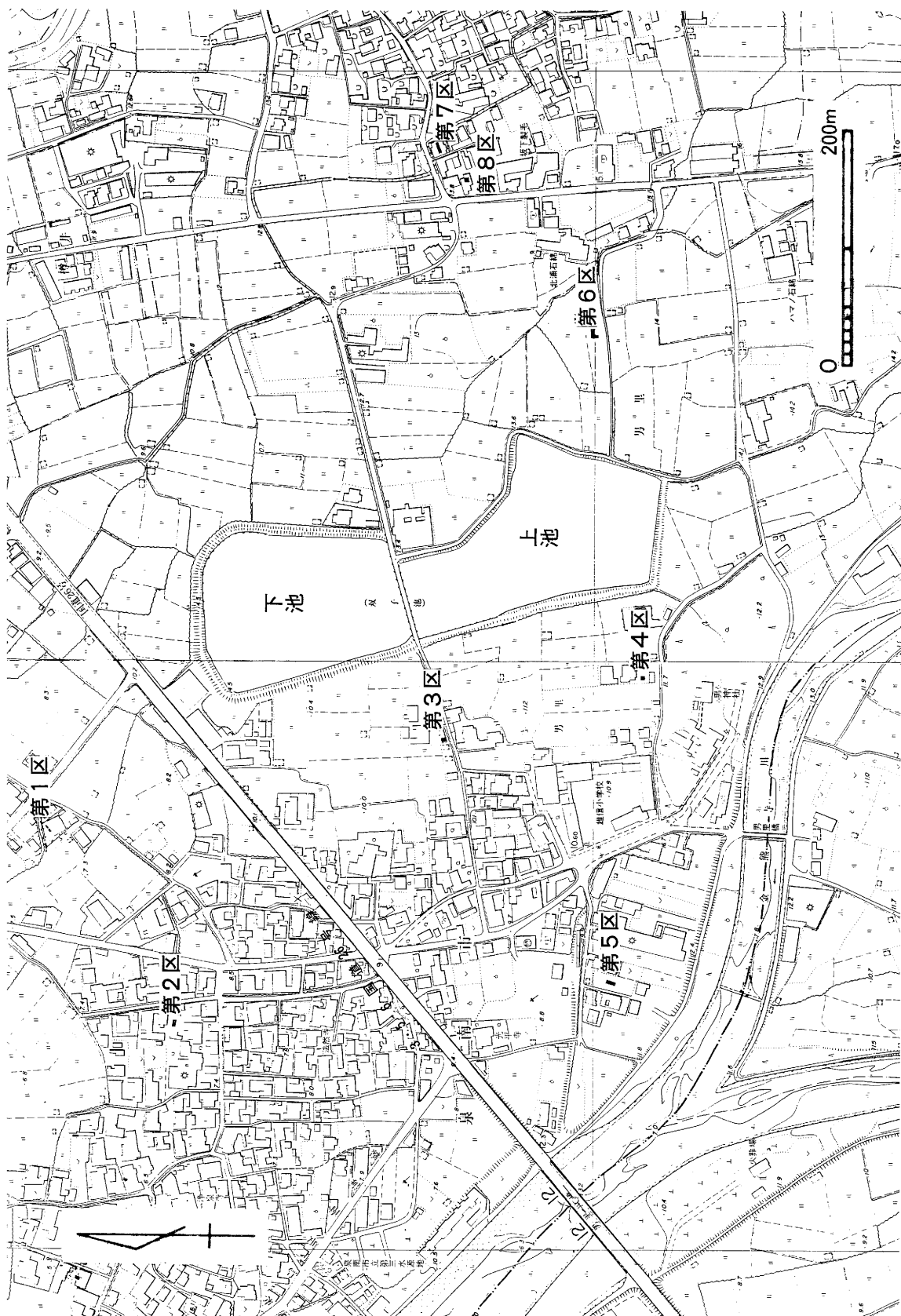




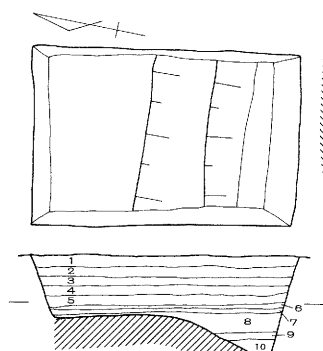
図版第六 遺跡分布図



図版第七 調査区位置図

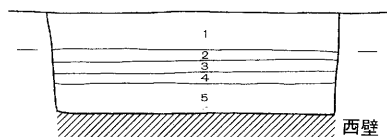




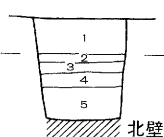


男里遺跡第3区  
遺構図並びに断面図

- |              |               |
|--------------|---------------|
| 1. 盛 土       | 6. 褐色混じり灰色シルト |
| 2. 暗灰色土(耕土)  | 7. 黄褐色砂質土     |
| 3. 鉄分混じり灰色土  | 8. 灰褐色粘質土     |
| 4. 灰色混じり黄色粘土 | 9. 黄灰褐色粘質土    |
| 5. 黄色混じり灰色粘土 | 10. 濃灰褐色粘質土   |



西壁

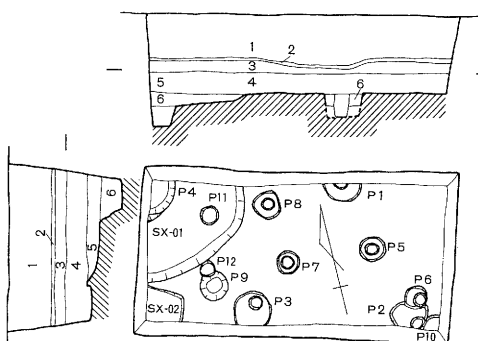


北壁

男里遺跡第5区 西壁・北壁断面図

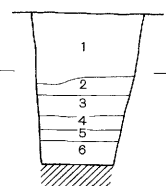
- |          |           |
|----------|-----------|
| 1. 盛 土   | 4. 淡褐色粘質土 |
| 2. 暗灰色土  | 5. 淡褐色シルト |
| 3. 淡灰褐色土 |           |

0 4m



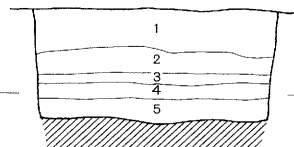
男里遺跡第2区  
遺構図並びに断面図

- |               |
|---------------|
| 1. 盛 土        |
| 2. 暗灰色土(耕土)   |
| 3. 黄灰色土       |
| 4. 淡褐灰色土      |
| 5. 灰黄色土       |
| 6. クサリ礫混じり褐色土 |

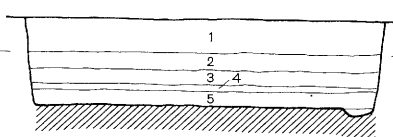
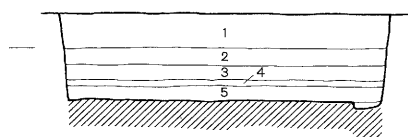


男里遺跡第1区  
北壁断面図

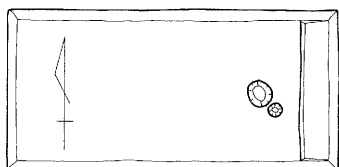
- |             |
|-------------|
| 1. 盛 土      |
| 2. 暗灰色土(耕土) |
| 3. 淡灰褐色土    |
| 4. 淡褐色土     |
| 5. 淡褐色砂質土   |



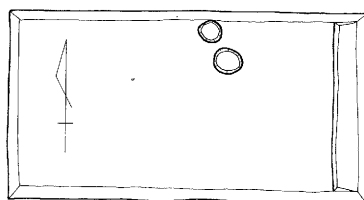
男里遺跡第8区  
南壁断面図



- |           |
|-----------|
| 1. 盛 土    |
| 2. 暗灰色土   |
| 3. 淡灰褐色土  |
| 4. 淡褐色粘質土 |
| 5. 淡褐色シルト |

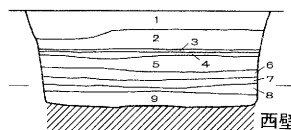


第1トレ

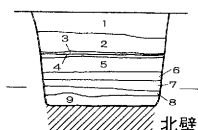


第2トレ

北野遺跡第1区  
遺構図並びに断面図



西壁



北壁

北野遺跡第2区 西壁・北壁断面図

- |          |               |
|----------|---------------|
| 1. 盛 土   | 6. 黄灰色粘質土     |
| 2. 暗灰色土  | 7. 黄褐色粘質土     |
| 3. 黄灰色土  | 8. 礫混じり黄褐色粘質土 |
| 4. 灰黄褐色土 | 9. 褐色土        |
| 5. 黄灰褐色土 |               |



